

■ 研究所だより

上平 泰博

津波により多くの児童と教職員が犠牲となった石巻市立大川小学校の惨事は、今もって忘れがたい記憶として私の脳裡にある。震災のあった翌4月に大川小学校を私は訪れていたからでもある。

本年3月10日、親たち遺族は県と市に対して総額23億円の賠償を求める訴訟を仙台地裁に起こした。津波から3年、大川小の避難対応を巡る責任所在のありようが、現場にいた教員および管理職、教育委員会に瑕疵があったのか否か問われていたが、今回の訴訟によって新たな場面を迎えた。遺族側の賠償請求行為は、「明らかな人災」であったという結論に至ったということになる。

校庭にいた108人の児童のうち70人が死亡、4人が行方不明という巨大な惨事だった。他校と比して多すぎる犠牲者、3年を経過しながら原因究明については、あまりに納得しがたく、あまりに悲劇的だという遺族の怒りとやるせなさが隠せないでいた。

私の訪れた曇り空の日は、泥にまみれた空洞の校舎がぼっかりと残っていた。周りを見渡しても建物らしきものは何もなかった。小さな校舎を囲むように自衛隊員らが無言のまま後片付けをしていた。川べりでは大掛かりな遺体捜索が行われていたが、廃墟と化した校舎と校庭には、まだわが子の遺体を探せないでいる遺族がむさぼるように探し求め彷徨い、放心状態のままじっと首を垂れ祈っていた。その光景は焼き付

いて離れない。

大川小学校は3階建て以上の一般的な鉄筋校舎とは違う造りだった。津波来襲となれば防ぎようもない低階層2階建てアーチ式の芸術的な造りである。しかもその校舎は、川幅の広い北上川まで100メートルもない近距離に建っている。

第二に、遺族に対する教育委員会側のこの三年間の対応は不誠実で、問題点や矛盾点ばかりが累々と山積するばかりだった。それはときどきのニュース報道でも確認できた。事実関係のみみ消しから言い逃れまで、遺族側の不信感は増幅するばかりとなった。

第三に犠牲者の多さの絡みでいえば、校庭と裏山は地続きになっており、強震後の津波避難先として最適地であったことは否めないという事実にある。裏山はやや急斜面ではあったが、子どもに登れない傾斜地ではない。地震があれば津波を予想し、高台避難が定石であることは昔からの言い伝えであり、その常識すら通用しなかったことへの保護者たちの怒りと不信感が奥底にある。

裏山退避か、それとも大橋(川べり側)近くの三角洲へ移動するのか、教職員の中に意見対立があって、マニュアル存否を含め判断を遅らせたと言われている。いよいよ校庭から移動を開始というとき津波は襲来して、後方列にいた子どもたちだけが事態に気づき即座に裏山まで走って逃げ込んだ。その子どもたちだけが助かっている。

地震発生から津波来襲までの50分間、防災無線で大津波警報が流れていた校庭には車で迎えに来た親たちに乗せられ帰った子どもたちを除き、全員校庭に待機させられていた。校長不在で決断が遅れたと言われていた。たとえ早めに大橋へ移動したにしても、地形上からして全滅の可能性は高かった。そうした諸々の「注意義務」を放棄した教職員の狼狽ぶりを遺族訴訟は問うているのである。

「すぐに高い場所へ逃げよ」という人類遺伝子にインプットされてきた動物的属性の直観や常識など通じないのである。校長に連絡を取ってから移動開始とか、マニュアルを探せとか、マニュアルの通りにとか、全員確認して整列させてからとか、地震津波情報を収集してからとか、そんなことをしては、すべて裏目となることは明らかではないか。複雑な謎解きをいくつも解き明かさないうちは事態の局面が開かれず、生き延びられないという切羽詰まった状況など全くないのである。15秒も走れば、一番安全な裏山へ逃げられるという判断と行動に特別な思考など要しない。「裏山に逃げよう」というひと言の呼びかけで済んだのである。ヒトは産業革命以降のグローバル近代社会においてローカル地域社会を崩壊しつつして、生き物であることの証しまでも放棄させられようとしている。

生死という機に及んで、教育という論理が最後まで持ち込まれていること自体が近代的な合理組織の非人間的、非動物的な卑しき悪態ではないか。先生の言うことを聞

かないで、本能的原初の赴くままに行動していれば命は助かったのである。危険が迫ってくれば離散するという動物行動まで教育は奪ってしまった。マニュアルや指揮系統、情報等々そういったものを全く考える必要もない最適地の逃げ場が目の前にありながら、なぜそれができなかつたのか。先生だって子どもたちだって、地震で津波が来れば裏山へ逃げれば助かるだろうと、もしものときを想像したこともあったろうに。だからこそ、遺族の方々の思いは晴れないのだ。

誰かれの命令や指示に依存しきる普段の利便と安全性、保護され続けていることに慣れきっている脆弱な危険性。安心安全のためにはマニュアルどおり危機管理訓練を年に数回程度つづけていれば、妥当だと考える安直な発想が反って危険だ。日常をみんなと遊んで、協力しあい、助けあい、ケンカもして智恵を出しあいながら、目のまえに困難や危険があれば、どう立ち向かって行動するのか、当事者である子どもたちには十分にチャレンジできるだけの可能性と体験が昔はあった。それがいま失われつつある。無責任体制下の学校で玉砕させられるくらいなら、せめて保護者判断の下におき、それもかなわないなら子ども自身の判断に任せて早く逃がしてほしいというのが、無念さを晴らさんとする親たちの偽らざる気持ちなのかもしれない。

*『協同の発見』誌の次号(4月号)は5月号と合併号となります。